地元で愛される地酒を

醸造再開から5年 目指す蔵は

16年前の阪神・淡路大震災で醸造蔵が焼失した泉酒造（神戸市東灘区）。前社長の故泉仙介氏の孫娘、泉藍取締役（34）が醸造を再開して来年1月で丸5年となる。再開時に代々当主が名乗る「仙介」を冠した清酒ブランドを新たに立ち上げ、出荷量を年々1割ほどずつ伸ばしてきた。「地元の飲食店での取り扱いが増えており、地域で愛される地酒に育てたい」と力を込める。

（記事・井垣和子、撮影・宮路博志）

―市場は縮小し、醸造をやめるメーカーも相次ぐ中、再開を決めた。

「26歳の時、母の実家の泉酒造を少し手伝うつもりで入社した。当初は日本酒についてほとんど知らず、醸造は機械化されていると思っていたが、実際は人の手に頼っており、驚きとともに強くひかれた。これは後世に残すべき伝統文化だ、と再開しようと決めた」

「今思えば、知らなかったからこそできる冒険だった。敷地内の倉庫を改造して設備を入れ、震災後に丹波で農業をしていた杜氏（とうじ）を呼び戻して指導を受けた。酒蔵が減る中で、周囲の蔵も助けてくれて弾みとなった」

―仙介の特徴は。

「同世代の食生活に溶け込みやすいお酒に、と考えている。3年前に迎えた杜氏も30代。和食だけでなくパスタや洋食も日常的で、食事のスタイルは幅広い。多様な食事に合わせられるように、大吟醸や純米吟醸など主に4種類をそろえ、香りや甘み、酸味などそれぞれに特徴を持たせた」

―販売状況と今後は。

「主に神戸や阪神間の飲食店やホテルでの販売が増えており、別ブランドも含め醸造量は約1万9千リットルと再開時から倍増している。5年ほど前は、神戸でも東北などの地酒を置く店が多かったが、口コミや紹介で若手オーナーの店を中心に広がってきた。県外の人に神戸のお勧めのお酒を聞かれたら、地元の人に仙介を薦めてもらえる、そんなお酒にしていきたい」

泉酒造取締役 泉 藍氏

この人に聞く

いずみ・あい　2000年、神戸芸術工科大芸術工学部卒。大阪市のデザイン会社などを経て、04年泉酒造入社。07年1月に醸造を再開。10年1月長男を出産。現在は杜氏に醸造を任せ、経営のかじを取る。香川県出身。